

一 「寄り添う」とは

「寄り添う」という教育は「子ども」を教育する上でかかせない手段だと思えますが、その本来の捉え方を誤っているのではないかとこの教育者をよく見かけます。

たとえば、その「子ども」の近くに「寄り添っている」とか「子ども」の話を聞いただけで「寄り添った」と勘違いしているパターンです。

私は本来「寄り添う」という崇高な教育方法をこのように薄っぺらい思いや行動だけで実行している教育者がとても気になります。

「寄り添う」とは何か。それは態度的にも心情的にも教育者側から「子ども」に近づいた時に自然と相手からも近づいてくる様子や感覚があることだと思えます。これはあくまでも自然にそうなることです。無理にとか強制的にはなく自然とそういう様子が感じ取れて初めて「寄り添った」といえるのではないのでしょうか。

だから「寄り添う」というのは本来、大変難しく容易に出来ることではない崇高な教育法なのです。この教育法を一旦身につけるとその教育者の教育は飛躍的に効果を発揮するはずで、教育者としては何としても身につけてほしい教育方法です。

私が「寄り添うことができるようになったかなあ」と思い始めたのは四十代前半の時だったでしょう。それまで、とにかく「子ども」にこちらの言うことを聞かせて、「子ども」が言うことを聞

(以下中略)